

戦争とは言葉の欠如 各現場で実践を広げよう

岡本厚(「台湾有事」を起こさせない・沖縄対話プロジェクト共同代表)

2024年1月21日の「総括集会」をもって、1年3ヶ月にわたった「「台湾有事」を起こさせない・沖縄対話プロジェクト」は予定していたすべての企画を終了した。22年10月の発足集会に始まり、23年2月、4月の台湾ゲスト、9月の大陸のゲストを招いたシンポジウム、その間にも15~20人規模の「サブ企画」を3回開催し、総括集会をもって一段落となった。

まずは、このプロジェクトに関心を持ち、支えてくれたすべての方に感謝したい。琉球新報社は、共催、後援のかたちで活動を支援してくれた。心から感謝したい。

メッセージ

プロジェクトの活動を通じて確認できたことは、対話プロジェクトの「メッセージ」としてホームページに掲げた。米中、日中、兩岸(中台)に対話を促す項目の他、沖縄は人間が生活しているところであり、軍事的視点から見てもはならないし、二度と「捨て石」にしてはならない(2)、軍事的には対立の地域とされている東アジアは、視点を変えれば世界でもっとも豊かになる可能性に満ちた地域であることを忘れてはならない(6)——なども大事な項目と考えている。ぜひ参照し、広めていただきたい。

私たちがこのプロジェクトを始めた2022年は、「台湾有事」なる怪しい言葉が妖怪のように徘徊し、明日にでも武力衝突が起きるかのよう一部の政治家、メディアが騒ぎ立てた。いまその騒ぎは収まっている。昨年11月の米中首脳会談により、米中は互いに「レッドライン」を試すようなことがなくなった。台湾総統選の直後、バイデン米大統領はただちに「台湾独立は支持しない」と明言した。短期的には台湾海峡をめぐる衝突は起きないと誰もが言い始めた。この1年の大きな変化である。

沖縄対話プロジェクトは、方法として「対話」を掲げた。そして、このプロジェクトの活動の中で、私自身、対話の重要性、可能性をより強く確信するようになった。戦争や暴力は対話(言葉)の欠如であり、それを防ぐにも、それを止めるにも「対話」以外に方法はない。ウクライナとロシアの間においても、イスラエルとハマスの間においても、やがて対話——言葉による交渉、協議、協定——が行われる。まして、戦争を起こさないためには、どんなに不信を持っている相手とも「対話」するしかない。

対話は「話せば分かる」というものではない。「理解できない」と思っていた相手と対等に向き合い、相互を尊重し、そして相手の意見を「理解しよう」とし相手にも自分の意見を「理解してもらおう」とする。こちらは正しく相手は誤っている、こちらは善で相手は悪、とは考えない。自分も間違っているかもしれないと考える。相互に学び合い、自分が変わっていく営みが対話である。(もちろん「理解」は「納得」ではないし、

まして「同調」ではない)

分断と対立は日本だけの問題ではない。米国の分断対立は「内戦前夜」と言われるほどだし、ヨーロッパ各国や韓国などでも分断対立は激化している。それらを克服していくのは双方の「対話」しかないし、実際、各地で様々な試みが行われている。対話の試みは、それぞれの陣営から「裏切り者」「利敵」などと非難されがちだ。しかも、何かが起これば、積み木崩しのように崩され、それまでの努力が水泡に帰してしまう。しかしそれでも勇気をもって対話の実践を積み上げていくしか道はない。

対面が原則

私たちの「対話」の原則の第一は、海外ゲストに実際に那覇に来ていただき対面（リアル）の議論を行うことであった。対話は意見や論理だけではない。人と人が直接に向き合えば、表情もわかり声の調子もわかり笑顔で言えば厳しい批判がうまく伝わることもある。

もう一つの原則は、シンポの前の日に、海外ゲストを沖縄の様々な「現場」に案内し、現地の方に説明、解説していただいたことである。嘉数高地、チビチリガマ、辺野古のテントには必ず行っていただいた。観光旅行では決して行かないこれらの場所を訪れたことは、強い印象をゲストたちに残したようである。戦争の実相と米軍基地の実態に触れ、平和を希求する沖縄の人の声を直接に聞いたことは、沖縄についての学びとなった。帰国後、現地メディアや研究会などで、沖縄で見聞したことを発信してくれたゲストの方も多い。

私たちは対話の端緒を開いたに過ぎない。台湾の人びととも、大陸の人びととも、わずかに触れあっただけである。また保守的な考え方の人びととも、世代を超えた対話も、東京の政治家たちとの議論も、「試みた」というにはあまりにささやかな模索に過ぎない。

しかし、対話は私たちだけがやる方法ではない。これからは、対話プロジェクトの試みに接した方々が、それぞれの現場で実践してもらい、広げていっていただく以外にはない。

対話は必ずしも愉快なだけでなく、むしろ煩わしく、効果も図りがたいものである。失敗も傷つくことも多い。煩わしさや失敗や傷つくことを恐れず、自分の非力を嘆かず、希望と勇気を持って進もうと、自戒を込めて訴えたいと思う。

(琉球新報2024年2月22日)